

## *Great Expectations* における Pip の分身

吉田尚子

### はじめに

*Great Expectations* (1860—1861) は *David Copperfield* (1849—50) と並んで Charles Dickens (1812—1870) の代表的な作品で、特に構成が緻密で円熟洗練された作品として彼の傑作の一つとされている。これらの二つの作品はともに Dickens の自伝的作品と言われていて、主人公が様々な試練を経て成長し、人格を形成していく過程を描いたビルドゥングスロマン（教養小説）である。*David Copperfield* は Dickens が作家になった主人公の David の中に彼自身の姿を投影させて、ある程度は実際の事実に基づいて書いた小説である。しかし、*Great Expectations* は Dickens の生涯の事実に基づくというよりも彼の精神的な意味における自伝的小説と言ってよい。David が外に向かって成長していくのに対して *Great Expectations* の主人公の Pip は常に自分の心の中を探求して内省化していく。従って、この作品は当時のイギリス社会を描いたというよりはむしろ Dickens 自身の忌まわしい過去から逃れたいという個人的な強い衝動から書いた作品で、主人公の精神面で Dickens の生涯と類似している箇所があちらこちらに見られる。

Dickens はロマン主義の影響が最も大きかった十九世紀初期に生まれ、後のヴィクトリア時代には最も人気ある小説家として活躍した。William Wordsworth (1770—1850) を始めとするロマン派詩人たちの詩論は現世にある物事の真の性質を見るためには人間の心は少なくとも一時的に現世の現実的な事柄から注意をそらし、内的生活に集中しなければならないというものである。そのため、Dickens の生まれた頃は以前よりも自己の内的生活を重視する時代であった。しかし、十九世紀中頃から実証主義的思想が出てきて、あるがままの客観的世界、つまり人間の意識から独立した現実の世界に価値が置かれるようになる。この二つの相対立する文化思想のつなぎ目のときに彼は小説家として多くの作品を書いた<sup>1)</sup>。*Great Expectations* はこのロマン主義に対する反応が最も強く出ている作品で、この作品の中心テーマは Pip の自我の探求の旅、失われた自我の再発見の旅である。この小論では Pip が魂の遍歴の果てにたどり着いた先は一体、どこであったのか、内省化していく彼から生まれる彼のドッペルゲンガー（分身）と関連させて考察したい。

## 1. Pipの自我の分裂

*Great Expectations* の冒頭の場面は、テムズ河の下流にある沼地のそばのわびしい教会の墓地であり、そこで幼ない Pip は突然、自分のアイデンティティを認識する。

My first most vivid and broad impression of the *identity* of things, seems to me to have been gained on a memorable raw afternoon towards evening. At such a time I found out for certain, that this bleak place overgrown with nettles was the churchyard; and that Philip Pirrip, late of this parish, and also Georgiana wife of the above, were dead and buried; and that Alexander, Bartholomew, Abraham, Tobias, and Roger, infant children of the aforesaid, were also dead and buried; and that the dark flat wilderness beyond the churchyard, intersected with dykes and mounds and gates, with scattered cattle feeding on it, was the marshes; and that the low leaden line beyond, was the river; and that the distant savage lair from which the wind was rushing, was the sea; and that the small bundle of shivers growing afraid of it all and beginning to cry, was Pip.<sup>2)</sup> (*italics mine*)

Pip がうすら寒い夕方、テムズ河がそばを流れている沼地の近くの教会にある墓場で、両親と兄弟たちは姉を除いてみんな死んで埋葬されていること、したがって自分は孤児 (“an orphan”) であること、さらに彼らの名前を一つ一つすべて確認した後、自分の名前は正式には Philip Pirrip であるが、略して Pip と呼ばれていることなどをはっきりと頭に刻みつけた。つまり、このとき、彼は生まれて始めて、突然電撃的に自分のアイデンティティを認識したのである。しかも、そこは沼地の近くの教会の墓地であること、そしてクリスマスイヴのうすら寒い夕方であったことなどその場所と時間をはっきりと脳裏に焼きつけられ、彼にとって幼年時の最も鮮やかな「原風景」となったのである。彼が自分のアイデンティティを求め始めたまさにそのときに沼地のそばにある「邪悪なノアの箱舟」 (“a wicked Noah’s ark”) (40) である監獄船から脱走してきた囚人の Magwitch と墓場で運命的な出会いをする。しかも、この Magwitch との出会いが彼の人生を大きく変えることになり、この冒頭の場面は *Great Expectations* の小説の進展に深く関わるようになり、象徴的な意味を持つ。囚人を見送る Pip が目にしたのはかすかに黒く遠くに見える「水路標識」 (“the beacon”) (7) と「絞首台」 (“a gibbet”) (7) であり、この風景は Wordsworth の *The Prelude* (1798–1805) の第十一巻にある風景を思い出させるが、このことは Wordsworth と Dickens とのつながりを示すものであり、この作品においても重要な意味を持つようになる<sup>3)</sup>。

彼はこの墓で Magwitch と会ったときに一応、自分のアイデンティティは何かを探り当てたが、しかしその後、彼の人生の航路が大きく変わると、彼のアイデンティティは揺れ始めるので

ある。Pip が Magwitch に脅されて、家から持ってきた食べ物とやすりを彼に渡したが、彼は仲間の Compeyson と一緒に捕まえられて監獄船に戻された。その後、Pip は金持ちだが風変わりな老婦人である Miss Havisham の遊び相手になるように請われて、彼女の家を訪れる。しかし、そのときから、彼を取り巻く世界も彼の価値観も一変してしまった。それまでは Pip は鍛冶屋である姉の夫の Joe が一番の友であり、がみがみ怒り散らしている姉よりも義兄の方が心の内を何でも話せる相手だった。そして Pip は大きくなったら、Joe の徒弟になって、鍛冶屋を継ぐことは当然で、自分はそれで幸福な生活を送れると何の疑問も抱かずに思い込んできた。しかし、金持ちの Miss Havisham の家に訪れたときに会った高慢で、冷たい、美しい女性 Estella から下品な階級の間人であると軽蔑されてから、Estella の虜となった彼は上流階級にあこがれるようになって、Joe の住む下層階級の世界が嫌でたまらなくなる。彼が Estella の愛を得るために紳士になりたいと思っていたまさにそのときに、Jaggers というロンドンの弁護士を介して、見知らぬ人から多額の遺産を Pip に譲るという申し出があった。そこで彼は紳士になるためにロンドンに修行しに行くが、Miss Havisham や Estella と出会ったときから、常に彼の心は揺れ動くようになる。

義兄の Joe はたとえ、身分が低い階級に属していても、非常に高潔で心のやさしい立派な人間であり、女友達の Bidy も Estella よりもずっと優れていてやさしい女性だということを Pip は十分、知っている。しかし、その一方で上品で美しい Estella や金持ちの Havisham の住む世界にどうしても彼は惹かれてしまうのである。

And now, because my mind was not confused enough before, I complicated its confusion fifty thousand-fold, by having states and seasons when I was clear that Bidy was immeasurably better than Estella, and that the plain honest working life to which I was born, had nothing in it to be ashamed of, but offered me sufficient means of self-respect and happiness. At those times, I would decide conclusively that my disaffection to dear old Joe and the forge, was gone, and that I was growing up in a fair way to be partners with Joe and to keep company with Bidy—when all in a moment some confounding remembrance of the Havisham days would fall upon me, like a destructive missile, and scatter my wits again. Scattered wits take a long time picking up; and often, before I had got them well together, they would be dispersed in all directions by one stray thought, that perhaps after all Miss Havisham was going to make my fortune when my time was out. (132-133)

彼の心 (“wits”) は Joe や Bidy の住む世界と Havisham と Estella の住む世界の二つの世界

の間で引き裂かれて、ばらばらになって解体してしまい、アイデンティティは分裂してしまう。彼が Estella を愛するのは男性として、抗しがたい魅力に惹きつけられたからであり、それは彼の理性、将来の見込み、心の平和、希望、幸福に背くことであり、失望させられることだと十分に承知しながらも、彼はどうすることもできないジレンマに陥ってしまうのである。彼のこの気持ちは哀れな「迷路」(“labyrinth”) (232) に入り込んだとたとえられ、ろうそくのような人工的な光に照らされる Estella と太陽などの自然の光の中にある健全な Bidy が対置され、彼の心はこの二人が象徴する世界を行きつ戻りつ、振り子のように揺れ動く。貧しいが、人に対してやさしい気持ちを持ち、労働を尊ぶ誠実で無垢な心を持った Joe や Bidy の生き方と、裕福だが、労働や貧乏な人間を卑しむ心の冷たい高慢な Havisham と Estella の生き方がここで対照的なものとして対置されている。その二つの生き方は単に彼ら個人の問題にとどまらず、前者の二人が表わす世界、すなわちキリスト教的慈愛に基づく精神的内面的価値を象徴する世界と、後者の二人が表わす世界、すなわち物質的豊かさを伴った文明的外面的価値を象徴する世界とのぶつかり合いを表わしている。それらの二つの価値は人物だけでなく、太陽などの自然の光とローソクなどの人工的な光を、また、故郷の家の鍛冶場にある炉や台所の火と、ロンドンで彼が住んでいるバーナーズ・インの炉の光とをそれぞれ対置させることによって、その二つの世界を対照させている。Pip の心の中はこの二つの世界に引き裂かれて、常にジレンマに陥っており、彼のアイデンティティは分裂してしまうのである。

## 2. 分身

十八世紀後半に医学で人間の肉体は二元的であるという考え方が生まれると、ドイツのゲーテなどのロマン主義の作家たちがそれに関心を示すようになり、その後、その考えはドイツから他のヨーロッパの国々に広がっていった。十九世紀の中頃、医者 A. L. Wigan が *The Duality of the Mind* (1844) の中で人間の脳は二つに分かれていると主張すると人間の心の中には二つの相対立する意志があるということが生理学的に説明され、人間の心の二重性というものが信じられるようになった。「二元性」“duality” というのは一つのものの中に二つのものがあるということ、すなわち一つのものが二つのものとして見られるということである。“duality” のそれぞれの部分はお互いに完全に似ているか、あるいは拒絶しあうか、つまり、パートナーとなるか、あるいは敵となるかのいずれかになる。しかし、いずれにしてもどちらの部分とも真実で、その二つが相互に補足しあって完全な一つを作り上げると考えられた。

“duality” から「分身」“double” という概念が生まれ、一人の人間の中に二人の人間が包み込まれていると考えられるようになり、文学における“double” は「ドッペルゲンガー」“*doppelgänger*” と呼ばれる。心の中の矛盾は解決できるように思えると同時に、解決できないようにも思われ、また、我慢できるもののように思えると同時に、我慢できないようにも思われる。そこ

には無限に広がる不確かさ、あいまいさがあり、めまいを起こさせるほど混沌としたものである。ドッベルゲンガーというのは多様なアイデンティティが存在して、自己の外部の世界である他人にそれをさらけ出すことである。そして分身というのは自己を高めることもあるが、自己を滅ぼすこともある。<sup>4)</sup> 文学に分身のテーマを取り入れて、一人の人間の中に自分に敵対する自己があるということを描こうとするが、そこにおいてロマン主義とのつながりが出てくる。以前からあった個人主義が社会で優勢になったことと相まって十八世紀後半から十九世紀初期にはロマン主義が人間の多くの領域で支持を得られるようになった。ロマン主義の特徴は個人の私的な経験を重視し、自己を注視することを勧めて、内的生活を優位に置くことであり、ロマン主義は人間の心の中に存在する不安定さ、あいまいさを人々にあらためて認識させることになった。そこで対立する原理の間での葛藤、つまり、善と悪、魂と肉体、人間の衝動への服従と衝動に対する抑圧など相対立するものの中で起こる葛藤などが文学作品のテーマとなり、人間の心の中にある矛盾、ジレンマから分身という概念が生まれ、分身のテーマがロマン主義文学と結合するようになった。そしてロマン主義が十八世紀末に起こってから、“double” は近代文学が主要テーマとして描くことになった「あいまいさ、不確かさ」を表わすために用いられる手法の一つとなる。ドイツの E. T. A. Hoffmann (1776–1822) は *The Devil's Elixir* (1814) の中で、崇高な精神と犯罪とが一人の人間の心の中で複雑に交錯している心理状態を描いた。つまり、一人の人間のパーソナリティが二つの相争う力に分裂した世界を描くことで複雑な人間の心理を表わそうとしたのであり、その分裂した心を表わすのに「分身」を使って表現した。

*Great Expectations* において Wemmick は公的生活と私的生活をはっきり分けていて、彼という一人の人間の中にまるで二人の人間が同居しているかのような印象を与える。彼は Jaggers の事務所では仕事に厳しい有能な人間で、訴訟依頼人に対して一切の感情を介入しない。しかし、自分の家に帰ると父親をこの上なく大事にするやさしい人間に変わってしまう。彼の家の前に橋があり、それを上げてしまうと外界と遮断されてしまい、まったく外と隔離された城郭のようになり、誰にも邪魔されない私的な空間の世界ができるのである。そのような二つの顔を持つ彼の顔は郵便箱に似ていて、事務所にいる時はその郵便箱のような口はぴったりと閉じられているが、事務所を出て家に向かうとその口は段々大きく開くようになる。彼は私生活での自己と仕事に徹して感情を一切、交えない公的生活での自己を完全に分けて二重生活を送っている。「双生児」と表現されている Wemmick は人間の心の分裂を身をもって一人の人間で示している。この Wemmick の分裂した自己の姿は Pip の場合は彼の分身として他の人間がその役割を担うことになる。

### 3. 分身と孤児

分身というものと、社会から疎外されて苦悩し、悩んだ結果、自分の秘密を持つようになる孤

児とは深い関係がある。孤児と分身という概念は無限に近づくものであり、その二つが同一のものになる場合が少なからずある。孤児は親がいないため、その名前や性質がいく通りにも取れるようなあいまいな存在である。孤児は往々にして虐待されることが多く、その苦しみのために自分の心の中に秘密を持ち、自分の分身を持つようになる。分身においては本当の自己はもう一人の自己から自由になろうとする。そこで孤児はつらい現実から逃れるために逃避行することを夢見て、この地上をさまよっているというイメージがついてまわる。そしてロマンティックな人間と同じように、孤児はその肉体は家族、社会につながれているが、魂は遠くに飛び立つことにあこがれると想像された<sup>9)</sup>。これらの孤児にまつわる諸々の矛盾が十九世紀前半に広がったロマン主義文学の中で系統立てられ、孤児と分身のテーマは十九世紀の二十年代に出た書物の中で注目されて、国際的に文学の中でよく用いられるようになった。孤児は一人であると同時に二人もしくはそれ以上の数の分身がいると思われた。したがって、孤児は弱いと同時に強く、柔軟であると同時にかたくなであり、秘密を持つと同時に開かれている。そしてまた孤児は英雄であると同時に怪物や狼にもなりえるし、束縛されていると同時に自由でもある。このように孤児には矛盾して相反する要素が数多く内包されている。この孤児のイメージは抑圧されて、隠された秘密を持つ自己を解放するという意味において、矛盾を内包するロマン主義文学とつながりが出てくる。孤児と分身を結びつけるということは服従と攻撃、妨害と自由を合体させることであり、そのため、孤児は不思議な存在とされている。分身を持つ孤児の秘密と逃避行ということが近代のロマン主義の特徴の一つとなる。この分身と孤児のテーマが結合したのは James Hogg (1770—1835) による *Confessions of a Justified Sinner* (1824) においてである。

親はいるが疎遠な関係しか持つことが出来ない子どもは自分を孤児のように想像し、それを「想像上の孤児」(“an imaginary orphan”)と言う。「想像上の孤児」は家にとどまりたいと同時に家を出たいという思い、親とけんかしたいと思うと同時にしたくないという思いが交錯し、子どもの親に対する忠誠心は分裂して、確信のなさ、ためらいのためにジレンマに陥る。分身の文学というのは言い換えれば孤独を主題とする文学であり、社会から閉め出された「追放者」“an outcast” や追放者としての孤児がその役割を担うことが多い。分身はその二重性のために普通では不可能なことができると考えられることから、分身とロマンスは密接な関係がある。

そもそも作家というのは一般的にロマンティックで多様な心を持つ傾向が強い人間のなる職業である。作家は自分の秘密の小部屋に自己の劇場を作り、自分の心の中に存在する謎めいた矛盾をつくづく考えて、心というのは相争う分子が奇妙に混ざり合った複雑な混合物だという思いを深めるのである<sup>9)</sup>。作家は自分の作る芸術の中で二重生活を送ると思われているが、作品を創ることで、二番目の自己“alter ego”を作ることになるからである。

ロマン主義が最も大きな影響を及ぼしていたときに生まれた Dickens がロマン主義の影響を受け、さらにロマン主義と深い関係がある分身の問題に関心を持ったとしても不思議ではない。

というよりも、むしろ Dickens 自身が作家として関心を寄せる以前に彼個人として、分身というものと向き合わざるを得ない事情があった。彼の父親は海軍省経理部の下級官吏の職にあったが、派手なことが好きで、金銭感覚が乏しく、一家はいつも経済的に苦しい生活を強いられていた。そして彼はついに借金が返せず、マーシャルシーの債務監獄に入れられ、Dickens は十二歳のときに靴墨工場で下層階級の貧しい子どもたちと一緒に働かされた。この経験のために勉強して紳士になりたいと思っていたプライドの高い彼はひどい屈辱と絶望感を味わった気持ちになり、大作家になった後も、これが彼の深い心の傷となって一生涯消えなかった。父親が債務監獄を出て少しの遺産が入ったあとも母親はまだ Dickens に工場で働くように熱心に主張したので、父親だけでなく、母親に対しても深い不信感と失望感を抱いた。彼に実際に両親がそろっていても精神的には孤児と同じ気持ちであった。Dickens の作品には受難に会う子どもたちの話が多く出てくるし、孤児が主人公となる作品も多いのはそのためである。Great Expectations の Pip も姉はいるが、両親や兄弟は早くに亡くなった孤児である。Dickens は自分を旧約聖書の Cain にたとえ、自分は人には害を与えない「小さな Cain」のようだと思ったそうである<sup>7)</sup>。親に罰を与えられ、追放されて、靴墨工場で働かされたつらい思い出から、自分を Cain にたとえることによって自分のことを「想像上の孤児」だと思ったのである。

一般に Dickens が子ども時代に親から受けた心の傷から Great Expectations を書きたいという強い衝動が生まれたと言われている。彼は両親に対して抱いた疎外感、失望感から自分を「想像上の孤児」と呼び、Great Expectations の主人公の Pip を孤児とすることで、孤児の Pip のイメージの中に自分を投影させたのである。子ども時代の貧困に対する恥ずべき怒りを胸に秘め、監獄に入れられた父を思い出す度に、惨めな貧困の生活から逃れるためには教育が必要であると痛感した。そこで、彼は主人公の Pip に孤独な「追放者」である孤児を演じさせ、さらにロンドンで紳士となるための教育を受けさせたのである。

#### 4. Pip とその分身

Great Expectations の小説を読んでも実際には一見して Pip の分身とおぼしきものは一人も登場しない。それなのに何故、Pip の分身というテーマが問題なのか不思議に思えるかもしれない。しかし、Great Expectations を読むと、一つの疑問が湧いてくる。Pip は実際には殺人などの犯罪を犯していないにもかかわらず、非常に強い罪悪感にいつもさいなまれている。Pip は気の弱い性格で何でもすぐ、悪いことは自分のせいにして、良心の呵責を強く感じる人物であると考えられないことはない。しかし、それにしても Pip の罪悪感はいかに強すぎないかという疑問は消えない。小説で語られている限りでは Pip は自分が紳士になれると思ったとたんに、恩人である Joe を見捨てたり、遺産をもらった Magwitch に対して彼は卑しい人間と思い、嫌悪感をあらわにしたり、俗物的な振る舞いをするが、実際にしたことと比べて、Pip が感じている

罪悪感の強さはあまりに大きすぎ、不自然であることは否定できない。彼はただ良心の呵責を感じるだけでなく、自分がまるで殺人でも犯したように思うのである。この問題に対して、Julian Moynahanはその疑問をPipの分身ということから解くことを試みた<sup>9)</sup>。Pip自身は上流階級ののし上がって、金、権力を手に入れたいとか、女性の愛を勝ち得たいという欲望は持っているが、それを実現するために積極的に行動することもなく、ただ、成り行きに身を任せるだけの非常に受身的な人間である。したがってEstellaに積極的に働きかけることもしないし、権力を手にするために権威ある人に対して正面から立ち向かうこともしない。しかし、よく考えて見ると、Pipにいやな目にあわせた人物はみな、危険な目に会ったり、不幸になったり、あるいは死んでしまったりしている。彼をいじめた姉のMrs. Joeは殺されるし、Havishamも大やけどして死ぬし、Estellaも夫のDrummlieに虐待されるというように彼にひどい目にあわせた人間は不思議にもみな、何らかの形で罰を受けている。もし、彼が実際にこれだけのことをしたならば、彼があれほど強い罪悪感を抱いても不思議ではない。そう考えると、小説の表面には出てこないが、もしかしたら、Pipは本当は多くの犯罪を犯したのではないかという疑念が出てくる。そこで、実際には彼がやらなくても誰か他人に自分の代理として行動させたと考えることも不可能ではない。この時点でPipの分身が彼の代わりとして、彼の復讐したい人間に罰を与えたと想像することもできる。

自分の分身を生み出すような人間は一般的に他人から冒瀆され、侵害され、破壊されると考えられている<sup>9)</sup>。Pipも姉のMrs. Joeからいつもがみがみと叱られ、棒で叩かれ、虐待されるし、PumblechookやWopsleなどの権威ある大人によって嫌な思いをさせられる。その点において、Pipと分身を生み出す人間は共通しているので、Pipも分身を生み出す可能性があるということになる。

Mrs. Joeが何者かによって殴られて、それがもとで死んだが、その現場には引きちぎられた囚人の足かせがあった。しかし、その足かせは脱獄してきたMagwitchがつけていたもので、彼がPipからもらったやすりで引きちぎったのは明らかだった。Pipはその足かせを見て、やすりを囚人に渡した自分が間接的に姉を襲ったような錯覚を起こす。

With my head full of George Barnwell, I was at first disposed to believe that *I* must have had some hand in the attack upon my sister, or at all events that as her near relation, popularly known to be under obligations to her, I was a more legitimate object of suspicion than any one else. But when, in the clearer light of next morning, I began to reconsider the matter and to hear it discussed around me on all sides, I took another view of the case, which was more reasonable. (120)



しかも、姉が殴られた日の夜、彼は Pumblechook たちから “George Barnwell” の劇の本を讀んで聞かされ、おじを殺した Barnwell がいかにも自分であるように思い込まされたので一層、そのような錯覚を起こしたのである。姉を襲ったのは結局、Joe の雇っている職人である Orlick だとわかる。そこから Orlick が Pip の悪の分身として Pip をいじめた姉を代わりに殺したという解釈ができる。Pip 自身は野望を持っているが、それを実現することには消極的である。しかし、Pip は Orlick という自分の悪の分身を使うことによって権威ある大人を情け容赦なく攻撃することができる。Orlick の身元は不明で、いつも放浪して暮らしている渡り職人 (“a journeyman”) (12) で、彼は罪を犯した “Cain” や「さまよえるユダヤ人」 (“The Wandering Jew”) (112) のようにあてもなく、放浪生活をしている。このように彼はある意味で社会からの追放者で、それは先に述べたように分身の特徴と一致している。彼には人間らしい良心のひとかけらもなく、野望や暴力性を理性で抑えることもできず、まったく本能だけで行動する悪魔の化身のような人間である。Orlick は、“He was a broad-shouldered loose-limbed swarthy fellow of great strength, never in a hurry, and always slouching.” (112) と描かれていて、地を這うように顔をうつむけて、暗い中を影のごとく Pip の後をつけるようにして歩いている。

彼のこのような姿は分身のイメージにぴったりであり、分身の象徴とされている影のような存在として描かれている。また、Orlick は Pip が好意を持っている Bidy に近づこうとするし、Pip の後をつけて、彼の行くところにいつもついてくる。彼は Pip が Joe の徒弟となって働いた鍛冶場から始まって、Havisham のいる Satis House、そしてロンドンへと、Pip と同じように移動する。Orlick は Pip が憎んでいた Pumblechook にも復讐する。小説の終わり近くで、彼は Pumblechook の家に押し入り、金を奪ったり、彼の顔を叩いたりして、最後に彼の口の中に草花年報を詰め込んでしゃべらせないようにした。これは Pip が自分にされたことへの仕返しとして Pumblechook に対してしたいと思っていたことと一致している。しかも、その前に Pip が Pumblechook に飛びかかって殴るという白昼夢を彼は見たが、これは Orlick が現実に Pumblechook にしたことと呼応している。また、Orlick は Pip が好意を抱いていた Bidy に感情をあらわにして近づこうとしたことは Pip が Bidy に対して現実にできなかったことを Orlick が彼の代わりに本能をむき出しにして行動に出たと考えてよい。

Pip は Magwitch を国外に逃がそうとする直前にこの自分の分身である Orlick と対決する。Orlick は暗い夜、沼地近くの水門小屋に Pip を呼び出して殺そうとしたとき、彼は Pip の犯した罪を並べ立て、Pip の性格を分析し、彼を野心家、裏切り者と呼ぶ。Orlick が好意を持っていた Bidy との恋を Pip が邪魔したこと、Satis House での彼の地位を奪ったこと、Mrs. Joe を殺そうとしたのは Pip がえこひいきにされたためであることなどを言う。また、ロンドンの Pip のもとに流刑地のオーストラリアから Magwitch が戻ってきた夜、暗闇の中で階段の所にうずくまっていたのも彼だったことがわかる。ここで、悪人の Orlick が告発されるはずなのに、彼

が逆に Pip を告発し、二人の役割は逆転する。Orlick に Pip は狼 (“wolf”) と呼ばれ、Herbert との格闘の時にも Pip は狼と呼ばれていて Pip の獯猛さが示唆されている。Pip の気弱な性格に Orlick の攻撃的本能が合体して、Orlick という人物に Pip は変装している。Orlick はここで Pip を単に殺そうとしただけでなく、Orlick の Pip の分析などから Pip は Orlick のゆがんだ暗い鏡像であることを示したのである。つまり彼は Pip という人間の中にある悪の恐ろしいカリカチュアであり、この場面で Pip も彼と同じ種類の人間であることが明らかにされる。

Orlick を Pip の関係から見ると色々な点で共通点があることに気がつく。Pip も Orlick も鍛冶場で Joe の徒弟であること、Pip は Havisham に遊び相手として雇われるが、Orlick も彼女の家の門番として雇われること、Pip は囚人の Magwitch と同志になるが、Orlick も Magwitch の敵である囚人の Compeyson の同志になることなどに気がつく。この水車小屋での二人の決闘は二人の人間同士の決闘というよりも、むしろ Pip と自分の心の中にある悪魔との戦いと言ってよい。彼はこの戦いによって、悪の方向へ走ろうとする古い自己を脱ぎ捨てて、新しい自己に生まれ変わるという一種の洗礼を受けたのである。この洗礼は罪の重荷を軽くするというより、古い自己を捨て去ることである。Pip が Orlick と水車小屋で会う前に、昔あった僧院の一部を使っている旅館に泊まるが、夜はそのの洗礼盤のような形をした小さい八角形の集会所 (“a little octagonal common-room, like a font”) (420) で食事をした。そこは洗礼盤 (“font”) と同じく八角形の形をしているが、洗礼盤はノアの箱舟の中で水を通して救われた八人を記念して伝統的に八角形の形をしている<sup>10)</sup>。つまり、Pip は自分の中の悪魔と対決する前触れとして象徴的に洗礼を受けたことになる。Orlick が Pip を殺そうとした時に、Pip は友人の Herbert や Startop たちに助けられるが、Orlick は夜の暗闇の中に逃げていってしまう。不思議にも Pip は彼を見逃してしまい、追いかけてもしないので、その後も自分の周りから彼に手を引かせることが出来ない。Pip は Orlick を警察にも訴えないし、決して捕まえようとしませんが、それはまだ、彼には Pip の分身としての任務が残っていたからである。Orlick が Pip の憎んでいた Pumblechook の家に押し入ることで彼の分身としての任務を終えると、Pip の中にある悪魔が抑圧されたことを象徴するかのように彼は刑務所に入れられて、物語から突然消えてしまう。まるで Pip の悪のエゴが囿いの中に閉じ込められ、二度と表に出ないかのようなのである。

Orlick が権威ある大人への復讐者としての分身なら、Drummler は Pip を翻弄した Estella に対して彼に代わって復讐する任務を担う Pip の分身である。Pip は Estella の美しさに惑わされて、彼女から冷たい仕打ちをされたが、結局、彼女は人間として何の価値もないような Drummler と結婚して、今度は彼女が残酷な仕打ちをされる。Drummler は Jaggers に「蜘蛛」と呼ばれ、高慢、貪欲、残酷、卑劣が一つになったような人間である。Drummler は Pip の悪の分身である Orlick がそのまま上流階級に移行した人物と考えられる。いつも沼地などのじめじめしたところに出没する Orlick と同じく Drummler も水陸両用の生き物のように海岸近くを這うよう

に歩いて Pip の後を影のようについてまわる。Orlick と Drummle は二人とも頑強な体つきであり、浅黒い顔色をしており、はっきりと言葉を発することができないなど外面的にも似ているところが多いが、彼らは似ているというよりもむしろ同じ人物である。Pip の心に深い傷を負わせた Estella を破壊するという「裏切られた愛」の復讐をするために Drummle は Pip の代理人としての機能を果たす。彼はその役目を果たし終えると、馬に乗った時、事故で死に、Orlick と同じように突然、物語から消えてしまう。

Pip は Satis House にいる Estella に会いに行く前に Drummle と Orlick に偶然に「青豚亭」で会った。しかし、それは偶然のことではなく、象徴的な意味を持つ。Pip は Drummle と暖炉の「火」にあたる場所をめぐる争ったが、その後、Orlick が Drummle の葉巻につけるための「火」を持って中に入ってきた。すなわち「火」という物によって三人のつながりが暗示されている。しかも、この「青豚亭」は Pip が少年の頃、Joe の徒弟になる前に宴会が開かれたところで、そのとき Pumblechook に嫌味を言われたし、またフランスから帰ってきて一段と美しくなった Estella を見て、恋に苦しみ、眠られぬ夜を過ごした特別の思いのある場所でもある。ここで彼に苦しみを与えたこの二人を二人の分身が復讐することになるが、その前に Pip は自分の悪の分身たちと、「火」という物質を介して対決する象徴的な場面である<sup>11)</sup>。

Havisham は Compeyson から裏切られて以来、男に対して復讐することだけを考えてきた。美しく成長した Estella が男たちを誘惑して、ひどい目に合わせるように仕向けて、彼女の復讐心を満足させようとした。Pip はその犠牲者であり、愛を知らない石のように冷たい心の Estella に彼は振り回された挙句、捨てられる。Havisham が Estella を使って自分を利用したことを知った Pip が Havisham に復讐心を抱いたとしても不思議ではない。Havisham は Estella にも見捨てられて、最後は Pip に懺悔した後、暖炉の火が衣服に燃え移って大火傷を負ってやがて死んでしまう。彼女を死に至らせたのは彼女自身の不注意によるものだったので、Pip の分身の仕業ではない。しかし、彼は彼女が首を吊ってぶら下がっている姿を二度も幻影として見ているのである。彼は彼女の部屋を一度出た後、Havisham がさびれた酒造所の梁にぶら下がっている幻影を見たので、気になって Havisham の部屋に戻ると彼女の衣服が火に燃え移っているのを目撃し、彼は彼女を救うために部屋に飛び込んで彼女を助けようとする。

…we were on the ground struggling like desperate enemies…the closer I covered her, the more wildly she shrieked and tried to free herself…I still held her forcibly down with all my strength, like a prisoner who might escape… (402)

彼は彼女を助けているつもりだが、まるで自分の宿敵と「格闘」しているようで、召使たちが驚いて部屋に入ってきた後も、彼女が逃亡しようとしている囚人であるかのように力いっぱい押さ

えつけていた。彼女は偶然の事故で死んだが、彼が見た彼女の幻影は彼が無意識下にある彼女に対する怒りの気持ちの表れである。Pip の Havisham に対する怒りはあまり表面上は語られていないが、彼の憎しみの気持ちはまるで敵と戦っているような格闘の場面に表れている。彼は意識の上では彼女を救いたいと思っているが、無意識的には彼女を罰したいという思いがあったと考えられる。その直前に彼女の幻影を見たとき、彼は自分に責任があるとほんの一瞬、思うが、それは彼女の死を予兆する幻影がその後すぐ、現実のことになるので彼は殺人者と同じ罪悪感を抱いたといえる。

人間の心の中というのは非常に複雑で、深く測り知れないものであるし、性格も自分で気がつかないことが多く隠されている。このような複雑な人間の心の中を表現するために分身というのが文学の中で使われたのであり、これらの Pip の分身たちによって彼の隠れた面が明らかになり、人間の心理の深みを一層はっきりと表現できたのである。

## 5. Pip の自我の再生

Magwitch が死んだ後、Pip が見る夢は肉体のみならず、精神も病んだ自己が健康を取り戻し、回復するプロセスである。彼は「大いなる遺産」によって、出世して紳士になること、Estella の愛を勝ち得ることなどの自分の欲望を実現させることを夢見たが、結局、それは失敗に終わった。この失敗によって、「大いなる遺産」を手に入れるということはこの宇宙は自己の心と同じ広さであるという自己中心的な唯我論と同じことであり、この世の中は自分の先入観や願望通りにはいかないことに Pip は気がつく。Pip の抱いていたその夢は自己の内的生活に耽って他者のことにはまったく無関心であるようなロマン主義者が陥りやすい間違った夢である。*Great Expectations* の中には自己の内省に耽り、外の世界を拒んで自分の砦に閉じこもり、破滅していく人間が多く登場する。Compeyson に裏切られたその日から、一切、外の世界との交渉を拒んで、時計を止め、日光を遮断して、古くなって黄ばんだウェディングドレスを着たまま、自分の部屋に閉じこもる Havisham はその最たる例である。科学の発達などによって起こった実証主義的考えが、十九世紀中頃にロマン主義にとって代わって起こってくると内的生活を捨てて外の世界に目を向けなければいけないという考えが趨勢になる。しかし、深い思慮もなく、外に向かって突き進んでしまうと、他者の自主性や領域を侵す危険性が出てくる。その結果、イギリスが行き着いた先は世界の国々を植民地にして自国の富を増やし続けたヴィクトリア朝の私利的な物質主義社会であった。先に述べたように Dickens が小説家として活躍した時代は唯我論的なロマン主義と客観的事実や経験を重視する実証主義のつなぎ目の時代であった。このような時代に生きた彼はロマン主義的生き方を全面的には支持しないが、しかし、まったくそれを否定し、内的生活を捨て去ることも良しとしない。その一方で、彼は外の世界にだけ向かっていく実証主義的な生き方も全面的に支持するわけではなかった。ヴィクトリア朝の物質主義的社会もロマン主

義の唯我論と同じく、やはり自己中心的で私利的である。それではヴィクトリア朝の物質主義とロマン主義との葛藤から一体どんな解決策があるのだろうか。その解決策を Dickens は夢の中で Pip に提示するのである。

Magwitch の死後、Pip は病に倒れ、高熱にうなされて、譫妄状態の中で夢を見るが、その中で Pip がこれからどのように生きていけばよいのかが示されている。

That I had a fever and was avoided, that I suffered greatly, that I often lost my reason, that the time seemed interminable, that I confounded impossible existences with my own *identity*; that I was a brick in the house-wall, and yet entreating to be released from the giddy place where the builders had set me; that I was a steel beam of a vast engine, clashing and whirling over a gulf, and yet that I implored in my own person to have the engine stopped, and my part in it hammered off . . . . That I sometimes struggled with real people, in the belief that they were murderers, and that I would all at once comprehend that they meant to do me good, and would then sink exhausted in their arms, and suffer them to lay me down, I also knew at the time. But, above all, I knew that there was a constant tendency in all these people—who, when I was very ill, would present all kinds of extraordinary transformations of the human face, and would be much dilated in size—above all, I say, I knew that there was an extraordinary tendency in all these people sooner or later to settler down into the likeness of Joe. (462-463) (italics mine)

Pip は自分が家の壁にはめられた煉瓦であり、その場所からはずしてくれと懇願していること、彼はものすごい音を立てている発動機に組み込まれている鋼鉄の棒で、その発動機を止めて自分を叩き落してくれとやはり嘆願する。そして、凶暴な殺人者だと思っていた人たちと「格闘」して彼らは自分を救ってくれようとしたのだと知り、彼らの腕の中に疲れ果てて崩れかかる。すると自分を腕の中に抱いてくれている人の顔は次第に Joe の顔になっていった。この広大なエンジンは弱者を破壊して生き延びていく現実社会で、彼がもはや属したくない機械的な物質主義的社会である。しかし、それと同時にそのエンジンは Pip の中の悪魔的な自己と考えられる。Pip の本当の敵は Orlick、つまり、彼自身の中にある破壊的な悪の部分であり、その夢の中の戦いは Pip の中の悪と、若者を救いたいと思っている権威ある大人の中にある善との間の戦いである。この夢の中で Pip は自分のアイデンティティが解体し、「深遠」(“a gulf”) (462) の中に深く深く落ちていき、彼にとってつらかった孤独な「自己だけの秘密の部屋」に来るが、そこさえも通り過ぎて「新しい第二の秘密の生活」に行き着く。そこは Joe がいて、彼をつなぎとめるが、自由にもさせてくれる癒しと休息を与えてくれる安楽の地であり、外の世界と一体化できる

世界である。彼が魂の遍歴をした果てにたどりついたところはやさしいキリスト信者(“this gentle Christian”) (463)であり、Pipのいつも一番いい友だち“ever the best of friends” (468)であったJoeだった。夢から覚めて、肉体も心も健康になったPipはエゴの抑圧から解放されて、他者と本物の関係をつなぐのである。

## 終わりに

Pipが高熱でうなされて陥った譫妄状態から眼を覚ますと彼はJoeの腕の中に抱かれているが、彼は故郷でJoeと過ごした子ども時代に自分が戻っているのに気がつく。子ども時代のイノセンス(無垢性)を喪失したPipは再びイノセンスを取り戻そうとする。彼の描いた夢のような空想は崩れ、現実に目覚めて、自分は他人の遺産に依存するのではなく、自ら労働して生きていかなければならないと自覚する。彼は自分の持っているものをすべて売って、Bidlyと結婚しようと思うが、彼女はすでにJoeと結婚してしまっている。彼の故国での行き場が失われ、イギリスを遠く離れてカイロでHerbertと一緒に小さな商社で彼のパートナーとして働く。物語の最後でPipは十年余りの歳月を経て、故郷にいるBidlyとJoeの家を訪ね、自分と同じ名前の子どもをそこで見つける。そしてSatis Houseを訪れ、Estellaと再会したところで物語は終わる<sup>12)</sup>。

Pipは汚れた自己を捨て去って、成長し、キリスト教的な愛に目覚め、彼の罪を償おうとする。しかし、それに対して彼に与えられるはずの救済はなく、彼は故郷から長く“the East” (481)つまり、「エデンの東」に追放されて、Herbert一家とともに地味な生活をする。このような結末はこれまでのDickensが書いてきた作品とは違って、ハッピーエンドではないし、前期の小説に見られたような人生を肯定する強烈なエネルギーはここには存在しない。そして、またこの結末は十九世紀のイギリス産業社会における大人たちの間違っただけの夢でもあった「大いなる遺産」に対する完全な批判にはなっていないという問題が出てくる。つまり、Dickensがこの作品の中で説こうとしたキリスト教的な倫理体系と罪を償おうとしたPipに救いを与えようとしなかったこの結末とが矛盾しているのではないかという疑問が湧いてくる。

この疑問を解く鍵はWordsworthとDickensとのつながりにある。Pipは夢から覚めて、結局Joeという彼の精神的な父である真の父に行きつき、イノセンスを取り戻して、新しい自己に生まれ変わる。しかし、それは*A Christmas Carol* (1843)のScroogeのように自分ひとりで達成したのでなく、Joeという他者を通して達成したのである。Wordsworth的な子ども時代のイノセンスを取り戻すための過去への回帰をScroogeのように自分の力だけで行なうと、またもやエゴを巻き込むことになり、唯我的になる危険性が出てきて、本物の完璧なイノセンスへの復帰が危うくなる。そこでDickensはこの*Great Expectations*においてはそれを他者を通して実現させたのである。Wordsworthの“Tintern Abbey”が*Great Expectations*のモデルであったと

言われている<sup>13)</sup>。“Tintern Abbey”と同じく、Pip は苦しい強烈な経験をした後、長い間、イギリスを離れてはるか遠い地で地味な生活を送った後、十一年ぶりに自分の故郷に旅人として訪れる。子ども時代を過ごした懐かしい家で Joe と Bidley, そして彼らの子どもと楽しいひと時を過ごして、昔の感情を取り戻す。その生の起源への回帰は“Tintern Abbey”にあるように昔の小さい時に味わった孤独を伴うものではなく、冷静で穏やかな達観した気持ちで過去を眺めることができるのである。唯我的な自己内省の向こう側には唯我的孤立に代わる本物の他者がいるという事実に Pip は気がつく。孤児の Pip は Joe の中に失われた父を発見し、その子の Pip を墓地に連れて行って、自分の両親や兄弟とのつながりを彼とともに再確認する。そして彼は自分の経験を告白の形で後世に残そうとする。そこには「私たちの愛してきたものは他の人も愛するだろう」<sup>14)</sup>と *The Prelude* の最後にうたって、後世の人々に自分の経験を伝えていくことによって他者とのつながりを訴えた Wordsworth と相通じるものがある<sup>15)</sup>。この物語の地味な結末は静かな秋のような抑えたような口調で語られるが、エネルギーの喪失とか、夢が破れて味わう失望感に満ちた気持ちではない。それは子ども時代に抱いた美しい感情を年月を隔てて、静かに思い起こす達観した静けさを伴った思いである。追憶を通して達成する子ども時代のイノセンスへの回帰を詩の中に詠った Wordsworth に Dickens は多くのものを負っている。Pip が魂の遍歴を重ねて多くの苦難を通り抜けて、たどり着いた先は結局、彼が始めに出発した地であり、円環的な結末となる。しかし、そこは出発した時よりも彼に安息を与えるところになっているのに気がつく。*Great Expectations* において、ロマン主義と実証主義との変換期に生きた Dickens にとってこれ以上ふさわしい結末は無い。これを象徴するようにロマン主義の発祥の地である墓地から物語が始まり、ヴィクトリア朝社会に蔓延していた物質主義社会の中を Pip は様々な試練を受けながら通り抜け、そして古い自己を象徴的に脱ぎ捨てて、真の他者との連帯が可能な自己に生まれ変わり、再び、もとの出発点である故郷とその墓地に戻ってきたのである。

## 【注】

- 1) Elliot L. Gilbert, “‘In Primary Sympathy’: *Great Expectations* and the Secret Life,” *Charles Dickens’s Great Expectations*, ed. Harold Bloom (Philadelphia: Chelsen House Publishers, 2000), p.136.
- 2) Charles Dickens, *Great Expectations*, rpt. of 1860-61 (London: Penguin Books, 1996), pp.3-4. 以後、この作品からの引用についてはページ数を引用箇所の後に付す。
- 3) この冒頭の場面と Wordsworth の *The Prelude* にある風景が酷似していることはこれまで度々指摘されてきた。U. C. Knoepfelmacher, “Mutations of the Wordsworthian Child of Nature,” *Nature and the Victorian Imagination* (Berkeley: California U. P., 1977); 富士川義之「ピップの原風景」『イギリス/小説/批評』(南雲堂, 1986) など参照。
- 4) Karl Miller, *Doubles: Studies in Literary History* (Oxford: Oxford U. P., 1985), pp.21-22.
- 5) Karl Miller, p.40.

- 6) Karl Miller, p.50.
- 7) Karl Miller, p.173.
- 8) Julian Moynahan, "The Hero's Guilt; The Case of *Great Expectations*," *Critical Essays on Charles Dickens's Great Expectations*, ed. Michael Cotsell (Boston: G. K. Hall, 1990) 参照。
- 9) Karl Miller, p.30.
- 10) 「ペテロの手紙 第一」3・19参照。
- 11) この小論では Pip の悪の分身として Orlick と Drummle だけを扱ったが、彼の善の分身としては Herbert, Startop など考えられる。また、Pip 以外の分身として Compeyson は Magwitch の悪の分身であることなどについても論じられている。そのことについては Karl P. Wenstersdorf, "Mirror-Images in *Great Expectations*", *Nineteenth-Century Fiction*, 21 (1966) ; Douglas Brooks-Davies, *Charles Dickens: Great Expectations* (London: Penguin Books, 1988) で論じられている。
- 12) 周知のように *Great Expectations* の結末を Edward Bulwer-Lytton の要請で Dickens がハッピーエンドになるように変えたとされている。あいまいな終わり方なので、議論の分かれるところであるが、Estella と Pip が結ばれるとは考えにくい。
- 13) Elliot L. Gilbert, p.148.
- 14) William Wordsworth, *The Prelucde*, XIV.
- 15) Elliot L. Gilbert, pp.149-150.